横須賀日日新聞
YOKOSUKA NICHINICHI SHIMBUN
市民記者がつくる
横須賀日日新聞©
INDEX
2 46年欠かさず到来
3 四条古流の包丁供養式
4 東京湾で「ふねコン」
発行所：神奈川新聞横須賀支社 〒238-0004 横須賀市小川町21-9 TEL.046(822)2020 FAX.046(823)3845 yokosuka@kanagawa-np.co.jp 第39号
神奈川新聞のご購読申し込みはフリーダイヤル 0120-446-709.1週間のお試し読みも受け付けています。購読料1カ月3,189円
平成27(2015)年6月7日発行

横須賀日日新聞　第39号
2015年6月7日

あなたが地域の主人公　2

テーマ：横須賀を愛する気持ち
（課題を魅力に変えて）

※許可を得て掲載しています。

あなたが地域の主人公 2

横須賀を愛する心

今、横須賀は人口減少に悩んでいる。転出率はさほどでもないが、転入率が低いという。住んでみようかな、とは思わないが、住めば居心地がよく、愛着を持つということだろうか？

そう単純ではないだろうが、横須賀は豊かな自然と特異な歴史が融合した魅力的な町だ。私は横須賀に来てまだ5年だが、他市に比べて自然環境系、歴史系の市民団体の活躍を強く感じる。

昨年、郷土史家の山本詔一さんに講演を依頼したご縁で一緒に町を歩いた。JR横須賀駅から三笠公園までの短い距離だったが、その道筋に近現代の歴史が詰まっている。開国の息吹、戦時の苦悩、復興の希望、日本の近現代が凝縮されている。

谷戸の山肌に広がる家々を見上げれば、日本の重工業の発展を支えた歴史が見える。今は高齢化と産業の空洞化の象徴のように言われ、横須賀の大きな課題となっているが、歴史を知ると、この谷戸を横須賀の魅力に変えるのが、今を生きるわれわれの役割ではないかと教えてくれた。

課題を魅力に変えて

市と県立保健福祉大学が連携して、学生が谷戸の空き家を安価に借りて居住し、地域のごみ出しなど高齢者支援ボランティアを行う企画が進行している。課題を魅力に変えるヒントがきっとまだ眠っている。

戦後の米軍基地司令官デッカー少将、その業績を「横須賀学の会」が掘り起こした。書籍「黒船の再来」を読むと、デッカー司令官の構想の元、地域福祉や教育、医療、女性の地位向上など、日本の民主主義の先駆けとなった横須賀の状況が生き生きと描かれている。

空き家を活用して住み、高齢者のゴミ出しを手伝う県立保健福祉大生（横須賀市提供）

代表の大橋祥宏さんは「横須賀はペリー来航以来の軍都であり、機密の多い町でした。そのため近現代の歴史はまだまだ研究が不十分。デッカーさんの業績もそのひとつ。市民レベルでの開拓が必要で、多くの市民に参加してもらいたい」と語る。

一方、横須賀の歴史には米軍と共存する複雑な市民感情も含まれる。そこには意見の違いも対立もある。NPOや市民活動の大きな役割に「アドボカシー」がある。弱者の「権利擁護」や行政への「政策提言」の意味だ。課題解決の提案は市民・NPO自らが出していくことが望ましい。両者が真摯（しんし）に話し合うことから、地域の活性化が生まれると信じている。

（横須賀市立市民活動サポートセンター館長・髙橋　亮）